



話室

談

東京プロ野球記者OBクラブ

第6号 2011年(平成23年)11月14日発行

過去の1試合本塁打率

ラビットボールが使われた49年は、542試合で874本と、はじめて1試合のホームラン率が1.61本になった。

ラビットボールが消えてもラッキーゾーンが設けられた球場があって、セは77年の390試合で1050本、1試合当たり2.69本。パは80年の390試合で1196本、1試合当たり3.07本。これが最高。

プロ野球「いま」

統一球「投高打低」の到来

防御率1点台二気に6人

今季のプロ野球は、ホームランの減少が目立つ。9月10日現在、交流戦もふくめて、セ・リーグは332試合消化して373本。

1試合当たり1.12本。パ・リーグは344試合で377本。1試合当たり1.10本。両リーグ合計しても1試合平均1.11本にしかない。

1リーグ時代は、総試合数よりホームランの方が少なかった。野球のダイゴ味はホームランにある“というのでラビットボールが使用された49年、542試合で874本と、はじめて1試合のホームラン率が1.61本になった。ラビットボールが消えても、各球場にラッキー・ゾーンが設けられ、大量生産につながる。セは77年の390試合、1050本で1試合当たり2.69本、パは80年の390試合、1196本で1試合当たり3.07本が最高だ。現行の1チーム144試合制になったのは07年からだが、1試合当たりのホームラン数は07年11.45本、08年11.47本、09年11.52本、10年11.59本だから、今季の少なさがわかる。

原因は今季から導入された反撥力の低い統一球によるものだろう。統一球に関しては、昨年の会報(第5号)で、古川義郎さん(共同OB)がくわしく説明している。話をもう一度、今季のホームランに戻そ

う。12球団すべてが、試合数よりホームラン数が少ない。

ホームラン数が減っているから、当然得点能力も落ちる。9月10日現在、両リーグ676試合を消化して、両チーム合計5点以下のロースコアはセが119試合、パが122試合、交流戦は79試合(144試合の55%)にもなる。極端な例をあげれば、広島は5月28日から6月1日まで4試合連続完封負け。阪神も5月18日から21日まで3試合連続完封負け。また楽天は5月6日から14日まで7試合で、0010110と、65イニングスで僅か3点しかとれなかった。

ホームランが激減しているのにくらべて、投手力は向上している。チーム防御率は、ほとんどの球団が2点台から3点台だ。最近4年間を見ると、07年ソフトバンクの3.18が最高で、3点台が8チーム、4点台が4チーム。08年阪神の3.29が最高で3点台が9チーム、4点台が3チーム。09年は巨人の2.94が最高で、3点台が6チーム、4点台が5チーム。10年は中日の3.29が最高で、3点台が7チーム、4点台が5チーム。

ところが今季は9月10日現在、2点台が6チーム、3点台が5チーム、4点台が1チームだ。最終的にはどうなるか、予想はつけにくいだが、近來にない、いい数字が出

てくるのではないか、まさに「投高打低」だ。投手も『投げやすい』の聲が圧倒的のようにだが、一発を気にせず投げられれば、これはプラスだ。個人成績を見ても、9月10日現在、防御率1点台はセが3人、パが4人もいる。2点台もセ9人、パ7人ずついる。最近10年間の防御率1点台は09年から05年まで両リーグとも無し。06年は両リーグひとりずつ。07年はパで2人。08年もパで2人で、セは両年とも無し。09年は両リーグで1人ずつ。10年はパで1人だ。

とくにすごいのがダルビッシュ有(日本ハム)で、07年から昨年まで1.82、1.88、1.73、1.78と4年連続1点台だ。今季も1点台を保っている。5月25日の2-0中日、6月1日の1-0阪神、6月8日の1-0中日と3試合連続完封勝利のパ・リーグタイ記録を作った。いずれも僅少差の完封だ。

さらに5月10日の楽天戦から6月15日の阪神戦の2回まで46イニングで無失点もマーク、59年に杉浦忠(南海)が記録した54回2/3につぐパ・リーグ史上2位の記録にもなった。古い記録を見ると、シーズン最高防御率は43年の藤本英雄(巨人)の0.73、432回2/3で自責点35。藤本投手は『ポパイ』とあだ名された鉄腕投手で、私事ながら、一番大好きな選手だった。50年、2リーグ制になってからでは、70年の村山実(阪神)が156回で自責点17、防御率0.98が最高だ。

1リーグ時代には40年に1点台が17人(うち0点台2人)、41年に13人(うち0点台3人)、42年は15人(0点台は無し)と、まさに投手が強かった。(二面へ続く)

記録は1つのはずなのだが…



友人の「長嶋茂雄研究家」ともいうべき平松忠俊氏が「プロ野球の記録はメチャメチャだ」と怒っていた。熱狂的な長嶋と記録のマニアだ。そこで、その怒りの見本を示してくれ、というので、別表のよな数字の違いを持ってきた。

見ると、たとえば長嶋の得点圏打率が1厘から2厘違っている。数字が二桁手な私が「1厘くらいいいじゃないの」というと、平松氏は「ダメ！ 記録は1厘違ってもダメ。3通りもあるなんて、絶対ダメだ」と全身を震わせた。そりゃそうだな。「データファイルを出しているべ

マガに『どこから出した数字ですか』と問い合わせたら、『NPBのBISです』という返事だったが、003号と014号で違っているのはどういうことなの？

NPBがおかしいのか？ あるいは、同じ出版元の本でも違っているのがある。

だいぶ昔のことになるが、われわれの世代で、「記録の神様」といわれた報知新聞の宇佐美徹也さんが生前に、「ぼくの『ON記録の世界』にも間違いがあるよ、電話や手紙でチェックされたよ」といつていたものだった。

ここはやっぱり、本家本元の総本山NPBに、しっかりと「絶対にこれが正しい」、というのを確立してもらおうしかない。

(東京中日・高田実彦)

◇長嶋茂雄の得点圏打率◇

「データファイル003号」(ベースボールマガジン社刊)
2033打数636安打 .313
「データファイル014号」(同)
2036打数640安打 .314
「定本・長嶋茂雄記録資料編」(報知新聞社、S50年刊)
2036打数640安打 .314
「ON記録の世界」(宇佐美徹也著、読売新聞社、S58年刊)
2036打数640安打 .314
「栄光の背番号3長嶋茂雄」(報知新聞社、S49年刊)
2032打数640安打 .315
「記録のなかの長嶋茂雄」(メディアファクトリー、H12年刊)
走者二塁以上 .321

◇長嶋茂雄の日本シリーズ1点差打率◇

「記録のなかの長嶋茂雄」(メディアファクトリー、H12年刊)
59打数23安打 .396
「長嶋茂雄の勝負強さ」(データファイル003号)
60打数23安打 .383

◇原辰徳の得点圏打率◇

「巨人の4番としての原辰徳」(データファイル014号)
1619打数462安打 .285
「スポーツニッポン」(1995年)
1617打数462安打 .286

◇吉田義男対金田正一◇

「データファイル004号」
328打数95安打 .290
「やったるで20年」(報知新聞社刊)
329打数102安打 .310

◇王貞治の満塁打率◇

「データファイル013号」 .317
「ON記録の世界」(宇佐美徹也著) .303

◇長嶋茂雄の満塁打率◇

「ON記録の世界」 .330
「定本長嶋茂雄」 .330
「週刊ベースボール'09.6.29号記録の手帳」 .345

(一面の続き)

2リーグ制になってからは56年の13人(セ8人、パ5人)0点台は無し)というのがある。投手が強くなった背景には統一球もあるだろうが、ストライク・ゾーンの拡大。ハーフ・スイングは、まずストライクをとられること(打者が球審に文句をつけることが少なくなつたのはいい傾向だ)などあげられるが、両リーグ審判部(記録部も同じ)が、統一されたことも大きいのではないだろうか。

(サンスポ・庵原英夫)

【統一球関連アンケート】

ゲームが締まっていい

統一球に賛成

去年まではこすったり、打者がしまつた、という表情をしたのにスタンドに届くホームランが多かったため試合がおもしろくなかったが、今年は投手の投げ合いで締まった内容になった。

(スポニチ 佐伯松次朗)

機動力と守備力の試合に

統一球の採用で確実に野球が変わってきた。打撃のデータをみてもセ、パ両リーグで本塁打が激減している。ボールの製造元(ミズノスポーツ)のデータでは、飛距離はこれまでのボールより1メートル飛ばないだけとしているが、こすつたような当たりの本塁打は影を潜めた。したがって足の速い選手を揃えたチームが有利に戦っている。当然のように、これからは機動力があつて守備力と肩の強い選手を揃えたチームづくりが進むのではないかと、と容易に予測できる。日本のボールは中国で製造しているが、大リーグの使用球より質がよいと聞く。値段も従来より3割くらい安く助かっていると球団関係者から歓迎されているようだ。

(朝日・吉村良二)

飛ばないボールには反対!

ホームランの一発逆転のスリルこそ野球の魅力といえる。息詰まる投手戦もいだが、お互いに打ちまくる打撃戦を、プロ野球には求めたい。

(報知・山崎 征)

この数年、「幻の野球場」を訪ねて全国各地を回っている。時代に埋もれた球場に、誰がどんなドラマを刻んだか、セピア色の球史に惹かれての気ままな旅である。

京都の衣笠山の麓にあった「衣笠球場」もそのひとつで、ここは私が立命館大の野球部時代に汗と涙を流したとりわけ思い出深い球場である。半世紀余りも経つての訪問とは、ちよつぱり面映い気がした。

野球場は1967年6月に閉鎖になって、跡地には立命館大の衣笠キャンパス（理工学部）が建っている。なに付近の電柱に貼り付けられた、かまぼこ板ほどの金属製プレートには、「衣笠球場」とある。あちこちの電柱に見受けられカタカナ表記もあった。

写真を撮っていると路地から自転車で飛び出してきた人がいた。近所の紅梅町に住む高田憲一さん（61）といった。こどものころから金閣寺裏の衣笠山一帯が遊び場で、衣笠球場のことは東京の国会図書館に向いて調べたほどの衣笠マニアである。

「ほら、キャンパスの中央広場のところにマンホールがありますやろ、そこがホームベース。その先のゴミ箱辺りがピッチャースマウンドですわ」

実測もしないのに、高田さんの記憶

はコンピュータ並みか、グラウンドの位置関係が鮮明らしい。

「大学の専用球場で練習をよく見に行きましたよ。阪神の名遊撃手だった吉田義男さんがいてましたな」

いろんな選手の名前が拳がったが、でも、へボピッチャーだった私の名前はついでに出てこなかった。

同級生には、投手の西田稔や内野手の岡嶋博治、捕手の平岩嗣朗らが出た。

もりでいた。ところが、体育の授業で

キャッチボールをしていたら、教官の保井浩一さんから声を掛けられた。

「君は野球やってたのか。どや、野球部に入らへんか」

保井さんは平安中時代に甲子園大会に出場し決勝戦でサヨナラ安打を放って優勝した球歴を持つ。私を野球部に紹介した直後、若いころに選手として在籍した東急フライヤーズの監督に復

◇私の青春記◇



衣笠球場のプレート

西田と岡嶋は中退して、西田は阪急へ、

岡嶋は中日へとプロの道を選んだが、岡嶋は中日時代に2度盗塁王になっている。その後、阪急、産経、東映に移

って、引退後は社会人野球のスリーポンドの監督も務めた。平岩は卒業して国鉄スワローズへ入団した。184センチの長身で愛称は「ロング」。マトが大きくて投げ辛かった記憶がある。

実は、私は大学では野球をしないつ

帰した。

私は秋のシーズンからの入部で初めは1年生扱いだった。先輩になる同級生の説教を正座して拝聴したものだ。

2年の春に「昇格」したが、異様な身分に同級生たちもやり難かったのではなかろうか。

ところで、私たちがプレーしていたころの衣笠球場は、木製のスタンドはすでに朽ちて無かった。板張りの外野

のフェンスも腐食が進んでいた。

49年（昭和24年）には、大学の専用球場でありながら大陽ロビンス（石本秀一監督）のホームグラウンドになって、公式戦が行われた。こんな逸話がある。47年に結成されたロビンスは当初、「太陽」といったが、経営に携わっていた大阪・船場の織維問屋・田村駒の二代目社長、田村駒次郎が「太」の字を嫌って「大」にしたのだそうだ。

「野球は点を取らなあかん。野球選手が太いのはあかんのや」

投手の真田重男が一枚看板だった。しかし、プロの本拠としての衣笠球場は短命に終わっている。50年9月に大阪・ミナミに大阪球場が完成すると衣笠球場はすっかり準本拠球場になってしまった。東京の上井草、州崎両球場が地の利のよい後楽園球場に客を喰われて衰退したのと同じ命運である。

私は衣笠球場の一帯を暫く散策した。すっかり新しい街に変貌している。球場から金閣寺にかけては畑で長閑な風景が広がっていたのに、今は住宅が建ち込み、衣笠山と衣笠キャンパスの間には龍安寺へ続く「きぬがけの道」が通り抜けている。あのプレートは球場を今に伝える唯一の証言者だった。

（朝日・岡田忠）

脇谷の

“ポロリ事件”



話がちよつと古くなったが、4月20日、甲子園での阪神―巨人戦における「ポロリ事件」について…。

7回裏、二死一、三塁でブラゼルが二塁手の後ろへ打ち上げた。風に流されたが、捕ろうとした脇谷の動きがふらつきだしお手玉。一塁塁審に背を向けて転がり込みながらボールを拾い上げた。土山塁審は「キャッチしたと見た」（本人談）とアウトを宣告。真弓監督が激しく抗議したが判定は覆らない。

ところが実況放送していたTBSのVTRを見ると、脇谷は地面に落ちたボールを拾い直している。翌日の各スポーツ紙は、ポロリの写真つきで「誤審」と大きく報じた。スポーツニッポンは、①一度はクラブにおさめたが… ②まさかのお手玉 ③ボールはポトリ ④慌てて再キ

ヤッチと写真4枚を使って「誤審」を再現している。（ポトリの場面はVTR）

土山塁審は「フォーメーション上、私が見るケース」という。だが脇谷の背中越しに見ることになつてしまった。位置が悪かつたのではなく脇谷の動きでたまたまそうなのだが、捕球を確認できたとは思えない。二塁塁審は一塁走者が二塁ベースを踏むのを確認しなければならぬが、打球が高く上がったので脇谷が打球を処理しようとしたときには、走者はとくに三塁に向かつていた。二塁塁審は脇谷のプレーを正面から見えたはずだ。しかし主審は二塁塁審に意見を求めなかつたようだ。

阪神は翌日、「判定の正確性向上を求める要望書」をセ・リーグに提

出した。昔なら「判定に抗議する提訴」というところだが、今では、判定については「要望」しかできない。

要望書について審議したセ・リーグは4月25日付で「要望書に対する見解」を阪神側に送つたが、その内容は公表されなかつた。

それを報じたのはスポーツニッポン紙だけ。それも2面最下段に「審判向上要望にセが『問題なし』とベタ扱い。誤審をあれだけ大々的に報じていたのにどうしたことだろう。

後日、改めて取材したが「審判の判定がすべてです」と冷たく答えるだけ。規定では「判定のさいビデオを参考にできるのはホームランだけ」とはなっているが、こんどのケースはあれだけはっきりしているのだから「判定を覆すことはできないが、落球だった」と認めることはできないものだろうか。それと、フォーメーションにこだわらず、「誰が一番よく見えたか」を審判団で協議することを勧めたい。

（読売・吉田和夫）

言いたい放題

もつと交流戦を

セ、パ両リーグ交流戦は今年もバのソフトバンクが優勝で、制度導入以来、セのチームは一度も優勝していない。以前からセのチームにはこの制度に余り熱意が感じられず「人気のセ」の通説にあぐらをかいている気がしてならない。「公式戦中の対抗戦の結果など、気にすることはない」というのなら、プロとしてちよつと違う気がする。日程編成や観客動員など複雑な事情があるとしても、当初1カード3試合制でスタートしながら、2試合制に変え「悪くても1勝1敗でいい、と勝敗にこだわらなくなった」のではないか。対抗戦なら矢張り3試合制で、それなりの決着をつけるのが、ファンにとっても応援のしがいがあるというものだ。シーズン末のCS戦の成功など「プロ野球が面白くなった」という声が高まる中だけに、交流戦も試合数を増やして1カード3試合制に戻せないものか。

（報知・土屋一重）

本拠地使えず、ああ楽天

楽天があえいでいる。開幕当初は意気軒昂だったが、福島に住んでいる小生としては、三位までとつか不安になる昨今である。

もちろん、東日本震災復興のシンボルとして極度の緊張感からくる疲労も低迷の

闇の美しき



受容するたくましさ

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」―広島にある原爆死没者慰霊碑に書かれている言葉です。どのようなことがあっても2度と武力を行使することはしない。

経済的に豊になり、平和を希求しよう。みんなが分かっているはずでした。

日本人は歴史上、核爆弾を投下された経験を持つ唯一の国民です。広島にはウラン原爆、長崎はプロトニウム原爆を落とされ20万人を超す人命が失われました。生き残った人達も長年、放射能被爆に苦しみながら、命を落としています。

あれから66年、今、福島第一発電所は放射能を撒き散らし、周辺の土壌や海や空気を汚染し続けています。核という圧倒的な力に翻弄されています。核に対する拒絶感は一切どこに消えてしまったのでしょうか。平和で豊かな社会は、何によって損なわれ、否められてしまったのでしょうか。理由は簡単です。「効率」です。

原子炉は効率が良い発電システムであると、電力会社は主張します。つまり利益が上がるシステムであるわけです。日本政府も安定供給から原子力発電を国策として推し進めるようになりました。メディアも原子力発電はどこまでも安全だという幻想を国民に植え付けました。そして気がついた時は、日本の発電量の30%、2020年には50%、30年には70%を原子力発電によって賄おうとしています。世界で3番目の原発大国です。効率的であったはずの原子炉は、今やパンドラの蓋をあけてしまったのです。

我々日本人は核に対する「ノー」を叫び続けるべきでした。日本人の技術力、持てる叡智を結集し、社会資本に注ぎ込み、原子力発電に代わる有効なエネルギー開発を、国家レベルで追求すべきだったのです。

6月9日、スペインのカタルーニャ国際賞授賞式で、村上春樹さんが以上のようなことをスピーチしました。全く同感です。6月10日大阪で、(株)きんでんの講演があったのですが、その前日「原発の話には一切触れないでください」と注文が入りました。小生としては珍しく3ヶ月ほど猛勉強していたので拍子抜け。

やけくそで金銭まみれ阪神タイガースの話をしてきました。その6日後、東京・明治記念館での間組安全大会。最近では珍しく800人ほどの大講演会でした。福島第一原発の建屋も建設したそう、すぐ100人の大部隊を現地派遣したそうです。震災特需の一端を見せられました。が、原爆被爆国・地震活動期に住む我々はもうどんなことがあっても核に頼ってはいけません。

再生可能なエネルギー、バイオマス発電、トリウム液体燃料、地下熱活用など、技術大国日本の生きる道はいくらでもあります。最近はそのことで頭がいっぱいです。原発の雄・広瀬隆さんの本は目から鱗でした。第3の敗戦ともいえる東日本大震災から立ち直るために、倫理と規範など、もう一度人間の原点に立ち返らなければならぬと老いの身に鞭打っております。

節電の暗さを思考に当ててもいいじゃないですか。電気代アップも受けて立とうじゃないですか。どう撤退するかは熟慮すればいいことだけのこと。原発は絶対にだめです。日本は再生できます。

2011年6月22日 夏至 猛暑日

(日刊・佐藤安弘)

一因である。だが、高校野球のメッカリ甲子園を本拠地とする阪神の中村勝元監督が、かつて「夏より春の選抜の時期に本拠地を使えないのが一番痛い」と知人に打ち明けている。春先の本拠地でのオープン戦や練習は、開幕へ向けて最後の微妙な調整をする大事なもの。今季の楽天は震災の影響で、この大事な時期に本拠地が使えず開幕を迎えた。現在の楽天の成績不振は、春先の調整不足によるものが最も大きな要因ではないかと考えるのは私ばかりではないはずだ。

(スボニチ 龍川裕)

ウルトラスロービデオをご存知

TVの地上波デジタル騒動の間に、TVのプロ野球中継の売り物となっているようです。主に投手の投球の分析・解剖が武器。超スローな映像だから素人が見ても投球の狙い、意図が読み取れる。バッテリー、とりわけ主役の投手にとっては、企業（人）秘密を暴露されづらい限りです。

これってTV局の創意工夫だけなのかな、と思ってしまう。「ミッショナー側の差し金かもね。低反撥の「統一球」が今季から採用され、並み入る強打者連がこそって自分の打撃を見失い、もがき苦しんでいる。さてそこで、投打を天びんにかけて、天の配剤。超スロービデオを何度も見返して立ち直ってくれよ、と深慮遠謀があったとして……。

(ティリー・下村喜彦)

会員計報

◆東 光晴さん(スポーツニッポン)

2011年3月29日死去。享年70

この原稿が掲載された3月28日(夕

刊フジの日付は3月29日)すでに東君

の意識はなかった。10日前に出稿して
いたので夫人に「まだ載らないか」と
うわごとのようにくり返して聞いてい
たという。
実は小生が依頼の電話をしたのが震

災直後だったが、苦しうに話しながら
「いままで誰も書いてない本当ことです」
と何度も念を押していた。死に直面しな
がら書いた「遺言」である。
(スポニチ 高山智明)

回想 直言 秘話 球談徒然

東京プロ野球記者OBクラブ

木枯らしが舞う寒い日だった。主
賓が一番に来ていた。昭和48年、東
京・四谷の鮮魚割烹料理店。V9を
果たした巨人・川上哲治監督(当
時)を囲む内輪だけのささやかな慰
労会が開かれていた。

主賓が今度は奇妙なことを言い出
した。

「いま、ここに長嶋が来るから
ね。オレがさっき呼んだんだよ」

ほどなくして、本当に長嶋茂雄が
やってきた。ベナントレースのたわ
いない話がひとしきり終わると突
然、川上さんが切り出した。



「長嶋、君の今のバッティングは
や3割はもうとも打てんぞ。ここ
でさつと辞めて、オレの後をやつて
くれんかね」
同席していた牧野茂ヘッド、藤田
元司投手コーチが長嶋巨人を支える
再建プランまで明かして、不世出の
スーパースターに初めて引退を迫っ
たのである。

「ここまで言う
と、川上さんはト
イレに立った。長
嶋は座り直した。
正座して帰りを待
った。」

ミスター監督解任劇は
割烹料理店から始まった

声の主は静岡・
修善寺で療養中だ

「監督、私は青空のよちな気持ち
で静かにバットを置きたいんです。
このままではどうしてもその心境に
なれません。あと1年、もう1年だ
け、悔いのない野球人生を送って、
そこで静かにバットを置かせていた
きたい」

結局、長嶋の希望が通った。さ

1980年10月21日、長嶋監督は
「男のけじめ」と辞任を表明した
が、実際はフロントによる解任だっ
た

東 光晴(ひがし・みつはる) 昭和39年、日大文学部
卒。スポーツニッポンを経て報知新聞社に入社。V3から巨
人軍と夏の甲子園高校野球を主に担当した。著書に「人間王
貞治」(読売新聞社刊)、「プロ野球ユーモア全集」(講談社
刊)などがある。

よなら長嶋の列島ファイバーは、
その1年後、49年のシーズンが終わ
ると、長嶋は新たに船出する注目の
自分のスタッフ名簿を発表した。

ヘッドコーチ 関根潤三
投手コーチ 宮田征典
バッテリーコーチ 淡河弘
なんとも脆弱なコーチ陣が並ん
だ。川上さんの再建プランは完全に

ず。4年目はリーグVもかなわず、
運命の5年目は最悪の展開。チーム
は浮上の気配もなく、7月には早々
に白旗を掲げていた。

「もうダメじゃ。長嶋じゃ巨人は
日本一にはなれん！」
怒りで体を震わせた男は、電話を
手に取ると、意を決してダイヤルを
回した。昭和54年、夏の終わりのこ
とだ。

「俺だ！明日東京へ電車で帰
る。オレの車を迎えにやるから、そ
れに乗ってきてくれ。後ろの座席に
毛布を入れておく。会社(読売新聞
社)が近づいたら

それをかぶって誰
にもわからんよう
にな……」

拒否されていた。最初から長嶋采配
に不安を抱いていた川上さんは、牧
野、藤田を自ら口説いて長嶋巨人に
残るよう要請していただけに、新ス
タッフ名簿のシヨックは大きかった。
周田が危惧していた2人の確執
が決定的に表面化した瞬間だった。

川上さんの不安は的中し、1年
目、長嶋巨人はチーム史上かつてな
いみじめな最下位に終わる嵐の船
出。2、3年目こそリーグ優勝を果
たすも日本シリーズでは阪急の軍門
に下って宿命の日本一奪還はなら
(毎週月曜掲載)

点鬼簿

(2011年10月末まで)

正力 亨氏

純真な心の人だった

巨人担当の79年オフ、新外国人獲得のため、
トロントでのウインターミーティングに出席
する正力オーナー(当時)に同行した。新外
国人の名前を探り出すため、必死に食い下が
ったが「君イ、ヤクルトがペルロソソ(バラ
ーゾ)とかいう選手をとるらしいぞ」と他球
団が狙っている情報ばかりで、肝心の巨人に
関しての口は固い。

ところが、ホテルに戻ると部屋に呼び出さ
れた。駆けつけると東京の巨人軍事務所と電
話中で「ロイ・ホワイ特が獲れそうだ」と元
ヤンキースの4番打者の名前を聞かえよがし
に口にした。面と向かっては一切明かさな
った。ニューズをさり気なく教えてくれたのだ
った。

正力オーナーが行くところいつも担当記者
にどっと囲まれ「オーナーお土産を……」と催
促されると、一瞬困った顔をした後、極秘ニ
ューズまで「発表」してしまう。サービス精
神旺盛、というより隠し事が出来ない正直な
方だった。

宮崎キャンプ視察のとき、よく球場前のう
どん屋で昼食を一緒にした。それぞれうどん
と必ず3個人入り稲荷寿司を一皿注文。3個の
お稲荷さんを二人で食べると……。 「君イ、食
べたまえ」残った1個をこちらに勧める。「い

や、もう一杯ですのでどうぞ」食事制限されているオーナーは空腹だろうと遠慮すると「そうかね。じゃあ(残り物に)福をいただくよ」とお稲荷さんに箸をのばす。そんなオーナーの笑顔が忘れられない。

また、東京では時折、六本木の京料理の店に。我々には高級な店だが、オーナーは「こんなところではしか振るまえてなくて。巨人軍が専用球場を持つていたら高級料亭に招待できるんだがねえ。親父(故正力松太郎氏)と後樂園(現東京ドーム)との約束があるからなあ」

自前の球場を持つことと、諮問委員会まで作って、ドラフト制度を撤廃することをいつも夢見ていた。

巨人がリーグ優勝を逃したときの日本シリーズでは、バの常勝チームだった西武を密かに応援。「西武を倒すのは巨人でなければいけない」が理由だった。

あの、江川事件では悪者扱いされたが、弁解がましいことは一切口にせず「君イ、長嶋(監督)と江川を守ってやってくれ」。

巨人をこよなく愛した、子供のようにな心をもった方だった。8月15日、92歳で亡くなられた。(報知・柏 英樹)

吉國 一郎氏

吉國先生のこと

私は1990年4月、55歳で毎日新聞社を定年退職。吉國一郎先生は89年3月に、第9代コミッショナーに就任されたので、取材記者としてのおつきあいはほとんどありません。

記者会見などで見た感じですが、コミッショナーと聴けば、スーツと頭に浮かぶ、宮沢俊義さん、金子鋭さん、下田武三さんらと、ちよつと違った印象でした。とにかく、いつも柔和で温厚。敢えて言えば「プロ野球を引っばって行けるかなあ」といった感じでした。

話は変わりますが、私が定年した年は、日米野球事務局を手伝うことになり、初めて吉國先生とお話する機会ができました。私が抱いていた印象と吉國先生は全く違った人だったことでした。

全日本の選手選出など、球団との折衝に障害は多々ありましたが、吉國先生は、「機構がこうやると決めたことですから必ずできます。心配しないで」といつも力強く後押ししてくれました。

そのあと、縁あつて、としか考えられないのですが、93年吉國先生が設立されたプロ野球制度改革本部に呼ばれ、先生が退任するまでお世話になりました。とにかくシンの強い人でした。慎重に調べ、方向が決まれば実現に最大の努力をされる。どの新聞にも大きく報道されましたが、コミッショナーとしての吉國時代の改革の実績は他に類がないと言つてもいいでしょう。

これは吉國先生を支えた両リーグ会長の川島廣守さん、原野和夫さんの三者が力を出し合った成果でしょうが、粘り強いまとめ役の功績とも言えましょう。

日本にこの夏、超党派の議員が国会に提出した「スポーツ基本法」が成立しました。吉國先生も、この立派な基本法のなかで、野球

界が益々発展し、社会に大きな地位を占めることを心から願っていると思います。

(改革本部で本阿弥清事務局長が吉國先生と呼んでおり、私もそれに倣った関係から、慣れた吉國先生を使いました) 9月2日95歳。(毎日 戸田 駿)

ウォーリー与那嶺氏

与那嶺の葬儀のとき、列席者に一文が手渡された。そこには「ウォーリーは3つの夢をかなえた」とあつた。その「3つの夢」とは①監督になって優勝する ②野球殿堂に入る ③天皇陛下と握手する

このなかで③だけは、不可能な夢のはずなのだが、一文には次のように記されていた。

「94年、アメリカ訪問中の天皇、皇后を歓迎するお茶会がロサンゼルスで開かれ、招待された際だった。天皇にご挨拶しながら、自然に手が伸びた。天皇もごく自然のように手を差し出された。『日本でだったら出来なかつた。アメリカでお会いしたから握手してもらえたのよ』。ウォーリーの高ぶつた声。3つ目の夢がかなえられた」

与那嶺の両親は明治の末期か大正の初期に沖縄からハワイへ渡つた移民。その親から天皇を「日本で最も尊いお方 近寄り難い存在」と聞かされていたのに違いない。その移民の二世が、戦後の外国人選手第1号として来日して活躍して「近寄り難い方」と握手する。与那嶺の一生のドラマだろう。日本時間3月1日、ハワイで死去。85歳。(東京中日・高田実彦)

成田 文男氏

名づけて「下町の太陽」。東京、ロッテなどで17年間、175勝の成田文男氏が4月21日、肝不全のため岐阜市内の病院で、64歳。

柳原 基氏

セ・リーグ記録部長。4月22日、87歳。

伊良部 秀輝氏

日米球界を台風のようにあばれて、走り去つた伊良部秀輝、7月27日、42才の若さで死を選んだ。

浅越 圭二氏

元阪神タイガース選手。8月6日、75歳。

河野 昭修氏

元西鉄ライオンズ選手。8月8日、81歳の誕生日を12日後に控えて。80歳。

平光 清氏

セ・リーグ審判。8月8日、73歳。

久万 俊二郎氏

阪神タイガース元オーナー。8月9日、90歳。

金井 義明氏

元コミッショナー事務局長。9月2日、79歳。

◆東京プロ野球記者OBクラブ会則◆

2011年6月16日改正

- 第1条 本クラブは「東京プロ野球記者OBクラブ」と称す。
- 第2条 東京運動記者クラブ員として永年に亘りプロ野球取材した者で構成する。なお本クラブの入会は原則として自己申請制とする。
- 第3条 将来的には、確たる本部事務局の設置を目指す。当分の間は役員が分担してその連絡事務に当たる。
- 第4条 会員同士の親睦、交流を深め、会員相互の共通の利益、便宜を図るのを基本的な姿勢とする。もちろん、日本球界の発展のための協力は惜しまない。過去の取材体験を生かし、球界活性化へ努める。また、会報「談話室」を原則年一回発行する。
- 第5条 次の役員を置く。会長11名 副会長112名、理事15名以内（うち事務局長 会計幹事 会報編集長を含む）
- 第6条 役員は会員から選出され、総会の承認を得て決定する。
- 第7条 役員の内任期は3年間とする。ただし、留任は妨げない。
- 第8条 会長はクラブを代表して会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- 第9条 本クラブの役員に名誉会長、顧問を置くことができる。
- 第10条 本クラブの重要事項は総会の決議で決定する。その他の審議、決定は理事会で行う。総会は会員全員参加を原則とし、年間一度は必ず開催する。その他、必要な場合は会長が召集する。理事会は理事が出席、最低月一回は開催する。
- 第11条 本クラブ員として社会正義に反する行為があった場合、役員会で協議、その会員に退会を命じることができる。
- 第12条 本クラブの目的遂行に費やす経費は会費をもってこれに充当する。従って外部からの寄付金は一切受けない。
- 第13条 年会費は3,000円とする。
- 第14条 会計年度は、10月1日を年度初めとし、翌年9月30日を年度末とする。

新会員です。

新たに次のOBが当クラブに入会しました。

中村英雄、池田孝一郎、石川顕、松下賢次（以上TBS）。太田真一（テレビ朝日）宮和夫、金子勝彦、平山登、若松明、寺尾皖次、藤吉次郎、吉成昂也（以上テレビ東京）。岩崎晃、梅垣進、赤木孝男、浅見源司郎、山下末則、吉田填一郎（以上日本テレビ）。西田善夫、高山典久、松本一路、佐藤隆輔、佐塚元章、真々田邦博（以上NHK）。中野義男、小篠菊雄、村上宏、坂本哲郎、吉田康麿、垣田則三、高田正雄、福田博司、三宅徹、高島一六、三原一男、荒井征夫、浜本健夫、大川和彦（以上フジテレビ）。西山和夫（東京中日）。

東京プロ野球 22年度決算報告

記者OBクラブ 自平成22年10月1日～至同23年9月30日

収入の部	
年会費（66名分）	195,520円
総会々費（25名）	150,000円
親クラブ支援金	100,000円
受取利子	145円
夕刊フジからの協力金	54,000円
前期繰越金	475,625円
合計	975,290円
支出の部	
会報5号制作代（300部） （往復ハガキ送料含む）	108,590円
会報送達代・コピーなど	7,160円
雑費（依頼稿）	2,500円
22年総会パーティー代	189,494円
会議室謝礼（茶菓）年間	10,500円
現預金次期繰越金	657,046円
合計	975,290円

※会報6号制作費は23年度経費扱いとなります
平成23年9月30日 会計：下村喜彦 監査：戸田駿

新会長は岡田忠氏

当クラブでは、4月の幹事会で任期満了の田口雅雄会長（白刊）に代わって岡田忠氏（朝日）を会長に、副会長に吉田和夫（読売）、古川義郎（共同）の両氏を互選しました。事務局長の高山智明氏（スポニチ）は留任です。

以上は総会の承認を経て正式決定いたします。

【投稿歓迎】

宛先 〒270-0003 4
松戸市新松戸五丁目17番13A 1101
田口 雅雄
電話・FAX 047-1345-1164 6

編集後記

○スポニチ・東君の遺稿。長嶋と川上の微妙な関係が分かり、貴重な「内輪話」。会員各位もぜひ御投稿を。

○統一球の実施は結構なことだが、引き分けが多すぎるのは考えもの。電力事情のせいもあるが、来季はなんとか……

○2013年予定のWBCについて日本の選手会が利益配分の改善を要求、不参加も辞さないという強硬姿勢。当然のことだ。アメリカだけに儲けさせることはない。NPBも強腰に！（読売・吉田和夫）